美術の窓(46)

国宝　一字蓮台法華経について

大和文華館館長　吉川逸治

数多い装飾経のなかでも、大和文華館の宝蔵する一字蓮台法華経巻は、法華経二十八品の最終にあたる普賢菩薩勧発品でありまして、意匠を凝らして荘厳につとめた経巻として名高いものです。しかしながら、保存状態がおもわしくなかったため、修理の専門家の方に委託し、昨年来、長期にわたって丁寧に修理を施していただきました。このほど当館にもどりましたので、やがて展観の機会がめぐりくることと存じます。

この経巻は、その名称が示すように、料紙に希有な趣向をこらしています。鳥の子紙に金銀の砂子や切箔を撒いた料紙に銀泥で界線を引き、経文の文字そのものを仏身とみなす考えから、一字一字を金輪でかこみ、光背身光となし、緑青や白緑で塗られた蓮台の上に載せて、一行十二字づつ列べて経文を整えています。さらに、飾りとして経文の上と下に金銀の箔を散らし、桜柳の模様を添えます。一字一字が蓮台に載せられ、光輪にかこまれている形姿が集まって、長大な千体仏構図をかたどるところは壮観です。

また、見返に描かれた絵も大和絵を考える上で、重要な作風を示し、多くの研究者達の知的好奇心をかきたててきました。

ここでは、吹抜の屋内で経を詠む身分高い様子の僧侶とその伴僧たちや、貴人の男女らの姿を描いた場面が添えられています。吹抜屋台の構図を組立てる衝立障子と梁桁の交叉によって、比較的狭い場面に多人数の人物を配置する巧みさは、熟練した構図法を示しています。

時代は十二世紀後半ということですが、すでに前代の大和絵の引目鉤鼻といった描法の格式もゆるやかになっています。殿上の間で貴人の法会に携わる僧侶やその導師につきそう伴僧など、ずんぐりした円顔をして、目鼻口の表情あらわに描写し、どことなくユーモラスな表現に新しい時代への推移を促された様子が見受けられます。画中の人々の姿態や動作にも十分に注意を払い、彼らの組合せに意を尽くして、画面を構成していますが、さらに、形の組合せだけでなく、色調に注目し、人々の服装に与える落ち着いた色合いに画面全体の色調における主導的な役割を与えているように思われます。

同(部分・見返絵)

国宝　一字蓮台法華経(部分・巻頭)　大和文華館蔵

季刊 美のたより No.102
平成5年2月25日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.